



経営論集

Vol.1, No.1, March 2015, pp.1-9

ISSN 2189-2490

■ 論文 ■

## 人間尊重の思想について

坪井 順一

### 概要

人間尊重の思想は歴史的な所産である。しかし、我が国では人間に対する意識が必ずしも高くない。本論では市民社会における啓蒙思想として、また、資本主義における人間疎外の問題として人間尊重のあり方を検討する。

キーワード：人間尊重、人間性、人間疎外、市民社会

(受領日 2015年1月31日)

### 文教大学経営学部

〒253-8550 神奈川県茅ヶ崎市行谷1100

Tel 0467-53-2111(代表) Fax 0467-54-3734

<http://www.bunkyo.ac.jp/faculty/business/>

# 人間尊重の思想について

坪井 順一\*

## 1. 人間という存在

人間とは何か、人間らしいとは何か、人間にとって最も望ましい社会とは何か。人間は何のために生きるのか、そして、人間を尊重することはどうすることか。人間が人間らしく、あるいは人間として生きるとはどういうことか。歴史の発展の過程は、人間の解放が少しずつではあるが進んできた過程でもある。今日の社会は、よりよい社会への過渡的な社会にすぎない。現代に直結する市民革命期の啓蒙思想は社会や国家との関係を取りあげて、人間のあり方を明示してくれた。社会を国家に優先させるか、国家を社会に優先させるか、それは国家や社会の構成員たる人間のあり方、人間観、人権思想、そして人間の尊厳と関係がある<sup>1)</sup>。今日の社会は社会が国家に優先した社会であるが、どれだけの方がそうした概念を認識しているかは疑わしい。日本における近代化と現代化の問題については拙稿に譲るとして<sup>2)</sup>、人間の尊厳と自由は市民革命を契機として認識されはじめ、社会の基本的理念となっている。ただし、現代社会の中で、市民社会以後のさまざまな権利が真に権利として認識され、人間の尊厳や人権が守られているかといえば、必ずしもそうではない。歴史を学び、歴史から学ぶことが多々あるが、民主主義にしても、さまざまな人権や平等主義に

しても、日本においては、市民革命のように国民が自ら戦い取ったものではなく、戦後の憲法の中で規範として与えられたものであることが、権利を考えることの希薄さにつながっている。人間らしく生きるとは、人間の「生」が保障され、豊かで文化的な生活を営むことのできる社会をいう。今の社会は「生きる」という権利が本当に保障されているのか、定年後も豊かな生活を営むことができているか、人間としての尊厳の中で死が迎えられる社会になっているかということに対して十分な考慮がなされていない。現代の社会は、豊かさの一方で貧困があり、格差が生じている。豊かさが享受できる人たちとは逆に豊かさに恵まれない人たちもいる。人間尊重を考える場合にこうした格差、人間としての平等を無視して考えることはできない。

人間の尊重は、労働の場では人間疎外の問題として具現化される。しかし、その前提として今日の商品化された労働力の問題に簡単に触れておく。周知のように資本の運動公式の中で、労働力も商品として取り扱われているという現状がある。認識するか否かにかかわらず、そうした現実があることをまず理解しなくてはならない。しかし、歴史の発展からすれば、それすらも大きな進歩であった。なぜなら、市民革命を経ることで個が解放され、労働力を自由に売ることができる時代が来たからである。人間は、さまざまな社会的拘束から解放され、身分制度もなくなり、自由権、人権、生存権、平等

\* 文教大学経営学部

✉ tsuboi@shonan.bunkyo.ac.jp

権などを得ることができたが、その一方で生産手段をもたざる人たちは、自らの労働力を売らないと生きていけなくなるという事態が生じている。今日の資本主義社会は、こうした矛盾の中に存在している。歴史認識に欠ける人たちは、今日の社会が最も良い社会だと考えがちであるが、社会はさまざまな矛盾を内包しており、その矛盾を止揚しながら新しい社会へと発展していく。歴史の進歩はその繰り返しである。

## 2. 生産性と人間性

C. チャップリン (Charles Spencer Chaplin) は映画「モダンタイムス」で、ベルト・コンベア方式による大量生産方式によって生じる人間疎外について痛烈に批判した。羊の群れのごとく工場に吸い込まれていく労働者、時間で管理され、昼食の時間も自動給食機によって給餌をしながら生産できるシステム（この試みは幸いにも失敗したが）、人間が機械を操るのではなく、機械に操られる人間。彼が描いた1930年代の生産様式は、生産至上主義のもと単調な作業を繰り返す近代資本主義の象徴であった。単調化された作業は、人間らしさを喪失させ、士気を低下させていった。1908年から1927年までT型フォードを生産し続けたフォードシステムの特徴は、移動生産システム、つまりベルト・コンベアによる流れ作業であった。生産性が最重要視されるなかでは、人間らしさが考慮される余地はなかった。

A. スミス (Adam Smith) は、周知のように『国富論』の冒頭で「分業」の有効性について述べている。分業の核心は作業の単調化と専門化にある。分業は作業工程を細かく分けること

によって作業が単純化されるが、それは作業の単調化をも意味する。分業の最大の利点は、熟練工ではなく単純な工程に分割された作業を単調に繰り返すことであり、未熟練工でも作業ができるようになったことである。こうして、未熟練工=近代工場労働者が生産の担い手として資本主義経済体制の発展に組み込まれていった。チャップリンの批判にもかかわらず、資本主義においては、労働からの人間疎外に対して、決定的な解決策は見いだせていない。J. S. ミル (John Stuart Mill) は、スミスの分業論で、たとえば、1つの工程から他の工程への移動ロスの節約が分業の1つの利点だとしたことに対して、第1の作業から第2の作業へ移動後にすぐに最大の活気を期待することはできないにしても、完全な休養が必要となった場合に、仕事を変えることで救済されたり、1つの仕事ばかりに限るより仕事を変える方が疲労を感じないで長時間働さうし、仕事が変われば、使用する筋肉や精神力も異なり、あるものが働く間に他のものが休まる。変化そのものが動物的元気を活気づける作用をする<sup>3)</sup>という。単調な労働に対して、その繰り返しでは疲労を感じるが、適度にさまざまな仕事が入れば疲労を感じることなく仕事ができることを指摘し、分業に対する1つの問題点を指摘した。また、労働者の技能のあり方について、作業の部分によっては技能や体力を必要とする要件が異なるため、最も難しい部分は技能のある者が担当し、最も激しい部分は体力のある者に担当させればよく、誰にでもできる作業は他に使用できない人に委ねる方が有益であるという<sup>4)</sup>。ミルは、生産性の向上に寄与するものは分業ではなく協業（多数人の結合行動）にあることを強調する<sup>5)</sup>。協業には単純な協業と複雑な協業があ

り、前者は、幾人かの人が同一の仕事をしなが  
ら助け合うことであるから、協業をしている者  
は誰もがそれを自覚している。後者は、何人か  
の人がそれぞれ異なった仕事をしながらお互い  
に助け合うもので、多数の人が関与し、異なっ  
た作業をしているため、協業していることは認  
識されにくい。ミルは羊毛を用いて上着を造る  
工程での協業を例に出し、複雑な協業の例を説  
明している。工程が単純化された労働は、労働  
者の士気を低下させ疲労感を高めるが、専門化  
(単純労働の繰り返し) するのではなく、多様  
な作業を取り入れれば、疲労も少なく、長時間  
働く活力も生まれてくるという指摘は、スミスの  
分業論に対する1つのアンチテーゼを示して  
いる。

ミルの時代から150年たった現在、経営の領  
域で人間疎外に対する試みがなされなかったわ  
けではない。1960-70年代には社会・技術シス  
テムアプローチ (Socio-technical systems ap  
proach) が、タビストック研究所 (Tavistock  
Institute of human relations) のトリスト  
(Trist E.L.) によって研究された<sup>6)</sup>。彼は、企  
業システムをオープンなシステムと捉え、生産  
現場を対象として社会システムと技術システム  
の最適化を意図している。しかし、このアプ  
ロッチは、風間が指摘するように<sup>7)</sup>、「人間性  
の尊重」、「生きがい・働きがいの追求」の一  
方策としてではなく、資本主義企業が「構造的  
変化」を遂げるなかで、企業の環境適応能力を  
強化するために組織それ自体が高度のフレキシ  
ビリティと学習能力をもち、「自己規制的シス  
テム」へと変革することによって実現され、ま  
た「労働からの人間疎外」現象の深化・拡大の  
なかで、労働者の消極的・積極的抵抗が経営  
コスト・生産性さらにはモラルの観点から無視

えなくなったことを前提として成立している。  
「自律的作業集団」を理念型モデルとする社  
会・技術システム論は、企業の環境適応能力の  
強化と凝集性の高い作業集団を生み出すこと  
によって「企業帰属心」を醸成し、労働者の仕  
事へのモチベーションを高め、現代企業の今日  
的課題の解決をめざしたものと見える。経営  
の側が労働疎外に対する一定の認識を持つこ  
とができるというけれども、前述したように1  
930年代にチャップリンが批判を込めて映像  
化している。資本主義は、さまざまな修正  
や倫理的な規範を取り入れたが、本質的な部  
分で生産性至上主義あるいは利潤極大化とい  
う性質をなくしたわけではない。人間にとっ  
て働きやすい労働形態とは何かという問い  
かけの1つのモデルがVOLVOシステムであ  
る。現実の企業活動の中で限定的であるが、  
人間疎外の解決を模索した生産形態である<sup>8)</sup>。  
VOLVOシステムは、ライン生産方式とは異  
なり、従業員がグループを作り(50のグルー  
プ)、並行して組み立てから完成車に至るま  
でを生産するシステムである。単純化され  
た流れ作業をなくし、協働のもとに車を完  
成させるという方式は、単調な作業からく  
るモラルの低下をなくし、人間らしく労働  
することへの取り組みとなった。自律的に働  
くことと作業全体への関わりを深めること  
で人間の多様性を高め、協働しながら作業  
をすることを可能にした。VOLVOシステ  
ムのあり方は、流れ作業ではなく、人間が  
人間らしく働くことの1つのあり方を示し  
ている。人間が協働する中でコミュニケーション  
を取り、自分たちの発意や総意で作業条件  
の変更が行われ、そして、最終的な品質に  
は責任を持つ。フォードシステムに比べて  
人間の意思が介在する余地が大きく、単  
純な作業から解放され、人間の労働からの疎

外をなくす可能性のある形態ということが出来る。しかし、生産性、市場競争、コストといった競争原理の中では、こうした生産形態は自ずと限界がある。市場の競争原理がなくなり、誰もが労働をし、社会的な生産の中で必要な物を享受するような体制になって初めて、人間らしい労働の形態としてVOLVO システムのような生産形態は意味を持つものとなる。労働から人間疎外は資本主義の矛盾の1つであり、人間性を考える上での体制的限界を示しているといえる。効率性を優先するだけではなく、人間が人間らしく働くことのできる体制を考えていかなければならない。たとえば、労働時間の短縮やワークシェアリングといった考慮も必要になる。ヨーロッパは年間労働時間では1400時間台に突入している。長時間労働ではなく、労働時間を短縮することで余暇を活かし、人間らしい時間を過ごすことが可能になる。また、短時間労働により、より多くの労働者を雇用することが可能になる。非正規雇用や派遣労働、契約社員等の不確定な雇用をなくし、正規雇用の中で労働のあり方を考えるべきであるが、これも企業の論理、資本の論理のもとでは人間性よりも企業の生産性や収益の方が優先されることとなる。企業の存在意義は何かを考えるとき、社会的生産の委託者であるという認識をもたなければ、企業の存在意義が問われることになる。

務台は人間疎外には3つの原因があるという<sup>9)</sup>。①人間そのものの固有の本性または条件にあるとするもの、②テクノロジーの急激な発達にあるとするもの、③テクノロジーの背後にあって、これを特殊の目的に結びつけて操作する現代の特定の社会構造にあるとするものである。①人間の固有の本性とは、人間は人間である限り、不完全で不安定なものであり、その狭

間でさ迷う存在であるということである。不安定な人間の感性は人間である限り、解消することはできないものである（務台は神に抵抗・反逆する現代人のヒュブリスによる疎外もあげているが、ここでは詳述しない）。②テクノロジーの発達から生じる疎外は、一面的には、人間が作り出したテクノロジーによって、人間が機械化され、画一化され、商品化され、無思想性に陥れられ、非人間的に支配されていることをいう。しかし、本当の人間疎外の原因は、その背後にある社会構造にあるという。③元来、テクノロジーは中立的・中性的なものであり、そのテクノロジーをどのように使うかは、特定の目的に結びつけて操作する社会構造にあるというものである。たとえば、道具は人の命を助けるためにも、人を殺すためにも使われる。道具をいかに使うかは人間の判断であり、道具に意思があるわけではない。テクノロジーについても同様であり、そのテクノロジーを用いて人間を操作する社会構造、具体的には、巨大な商品生産社会にある。利潤の追求を目的とした現代の社会制度は、テクノロジーを中性的なものから反社会的なものへと変化させる。この状況からの人間性の解放は、商品生産社会を構成する資本主義体制そのものとの対立によってのみ解決できることとなる。

人間のあり方を示したものにヒューマニズムという言葉がある。古代から、その時代の中でさまざまなヒューマニズムが現れてきた。ヒューマニズムとは、「人間の生命、人間の価値、人間の教養、人間の創像力を尊重し、これを守り、いっそう豊かなものに高めようとする精神」<sup>10)</sup>であり、これらを守っていくために、人間の意識を高めていかなければならないという問題である。人間の生命について、多くの人

私たちはどれだけ真剣に考えているのであろうか。憲法で保障されたさまざまな自由権をどれだけ真摯に受け止め、それが実践されている社会であるかどうかを検証しているのであろうか。現代社会は、自由な社会ではあるが、形式的な自由でしかない。たとえば、職業選択の自由とはいうが、誰もが自分の就きたい職業に就職しているわけではない。すべての人間が希望する職業に就くことは不可能にしても、誰もが満足して仕事ができるような社会にすることは可能である。人間が豊かに生き、安心して老後を迎えられる社会、働ける間は社会に貢献し、老後は豊かに暮らせる社会を考えることは理想かもしれないが、それは現実のものとして実現されなければいけない問題である。人間の生命を尊重するとはそういうことである。人間の価値について、基本的に人間は同じであり、平等な存在である。人種差別や貧富の差で人間を見ることは間違いである。しかし、現実には差別や格差は存在している。そうした不合理を解消しようという動きは遅々たるものである。近代市民社会的な平等主義や基本的人権の思想は日本には元来存在しないものであり、社会に対する意識については、まだまだ市民社会の意味を学ぶべき段階から進歩はしていないといわざるを得ない。

人間として、嘘をついたり、人を欺したり、陥れたり、盗んだり、殺したり、こうした行為がなくなり、人が人に対して優しくなり、信じ合い、労り合い、誰もが安心して豊かな生活ができるような社会は来ないのだろうか。戦争に訴えないで理性的に話し合いで解決する社会は来ないのだろうか。すべての人が善であり、すべての人のために社会があるというのは、近代市民社会の基本的な思想である。しかし、人間

の意識の進歩は、社会の技術革新に比べれば隔絶の差がある。平等や人権というけれども、そうした考え方がなされるようになったのは、4大文明を基準として今日の社会に至るまで6000年しかたっていない。6000年たってようやく形式的な平等概念や人権意識が芽生えたというべきかもしれない。人間が、本当の意味で平等で人権が尊重される社会になるまで、あとどれだけの歴史を刻まなければならないのか。そうした社会をめざして人間の意識を少しずつでも変えていかなければならない。それは教育の使命でもある。

付言するならば、1つの国家だけが独立し存在するのではなく、地球全体が1つの国家として成り立つような社会にしなければならない。EUのような地域共同体がもっと広がり地球全体が共同体社会を形成するような社会を考えていく必要がある。排他的経済水域のように経済的な利害が優先し、地域や領土問題が存在するのではなく、等しく誰もが開発できるような体制、かつて宇宙船地球号として環境問題において、地球の一体性が主張されたことがあったが、国家という枠ではなく世界という枠で物事を考えるような社会にしていかなければならない。歴史の発展を考えない人は、現実の体制や社会に満足し、社会的な変革を望もうとしない。価値判断の基準は現在の個人の幸福ではなく、社会の誰もが幸福になる社会を形成することである。歴史は進歩する。社会のさまざまな矛盾が解決され、よりよい社会を創っていかなければならない。そのためには、あとどれだけの歴史を経なければならぬのだろうか。

### 3. 人間尊重の思想

今日的な人間尊重の思想は、市民社会形成期の啓蒙思想として現れてくる。ホッブスは、「人間の本性」について、詳細に究明し、社会における人間のあり方を考察しようとした。まず、人間は本来平等であるという<sup>11)</sup>。自然は人間の能力を平等に作った。人間にとって肉体的、精神的な差異があるように感じるけれども、総合的にはわずかな差しかない。多くの人が自分より能力を持ち、知識があると認めながらも自分と同じ程度に賢明な人間がたくさんいることを信じようとしたくないのが人間の本性である。自然的には人間はあらゆる権利をもつ<sup>12)</sup>。自然的な状態の中で人間は自己の生命の防衛のためにあらゆるものを用いてもよい。万物に対する自然の権利が存続する限り安全は保証されない。それ故、可能なあらゆる方法によって自己を防衛しなければならなくなり、戦争状態が生じる。しかし、戦争状態をなくし平和を求めるならば、万物に対する権利を喜んで放棄すべきである。戦争状態は各人が好むことを行う権利を保有するところから始まっており、誰もが等しくその権利を放棄することで戦争状態は回避される。ホッブスはマタイの福音書を引用しながら「すべて自分にしてもらいたいことは、あなた方もそのように人びとにせよ」という<sup>13)</sup>。ただし、権利を放棄するといっても、すべての権利が放棄されたわけではない。生命や傷害、拘束など生命を奪おうとする行為に対しては抵抗する権利がある。権利を放棄して、何が、生命の安全を保証するのか。戦争を肯定する自然状態を譲渡するという契約概念のもとで生命の安全を認め合うのである。ホッブスは

「結ばれた契約は履行すべし」という<sup>14)</sup>。契約が成立しないところに権利の譲渡はあり得ない。契約は、何らかの強制力によって履行され、維持されている。契約を破棄すれば、契約を履行しているときよりも大きな不利益を被る、あるいは処罰の恐怖のなかで契約は維持されていく。何らかの強い強制力とは、主権者による権力である。ホッブスは人間尊重という概念の実現を主権者の意思として表明している。主権者とは「一個人の人格であり、その行為は多くの人びとの相互契約により、彼らの平和と共同防衛のためのすべての人の強さと手段を彼が適当に用いることができるように、彼ら各人をその行為の本人にすることであり、この人格を担う者」をいう<sup>15)</sup>。主権者は、自分を守ってくれる存在として、人間または合議体に自発的に服従を同意することによって生じる。その結果、主権者＝国家は、権力をもつことで、社会的な契約＝法律に対する強制力を持ち、契約違反に対しては強制力を発揮することになる。自ら平等の立場で選んだ主権者のもとで、契約を遵守し、生命は保護される。主権者は、国民に代わって生命の尊重・保護とその条件としての平和の維持のために人びとと契約を結んだのであり、全力で契約を遵守することに取り組みねばならないという近代的な国家の目的が明示されている<sup>16)</sup>。ホッブスは、法律を自己保存という万人共通の普遍的規範としての自然権から導出された自然の法＝戒律に基礎づけられた公正の原理に支えられたものであり、主権者の意思であり、同時に主権者を選んだ契約者全員の意思であり、治者と被治者の同一性という近代国家論の原理を定式化している<sup>17)</sup>。ホッブスの求めたところは平和であり、人間としての生きる権利である。主権者は戦争状態を回避するため

に権力が付与されているわけであり、被治者はいかなる状況においても契約を遵守する義務を持つ。それでは、権力者は絶対的な存在であるかということ、被治者は、3つの点において権力者に対して抵抗権を持つという<sup>18)</sup>。1つは、生命を奪おうと力で襲いかかる敵に対してである。人間はいかなる場合でも、自己を保護する権利を放棄する必要はない。2つは傷害、鎖、投獄の場合。これは何の利益も伴わず、また暴力を持って迫るとき殺されるかもしれないからである。最後は、生命の安全保障と生活を維持していく手段としてである。ロック (J. Locke) は、周知のように自由、平等、主権在民に加えて人民の利益に反する政府を打倒してもよいとする革命権の思想を述べており、アメリカの独立宣言やフランスの人権宣言の中には革命権の思想が含まれている (日本国憲法では革命権の思想は除外されている)。ホッブスには革命権の思想はないが、個人的な抵抗権は存在しているという<sup>19)</sup>。たとえば、主権者が戦争に行くことを命じた場合、本人が行きたくなければ金を払ってでも免除してもらってもいいし逃亡してもよい<sup>20)</sup>を引用しながら、これが今日の英米に伝統的な良心的徴兵忌避の先駆形態であるという。ホッブスは、何よりも人間の生命が保障されることが第一であると考え、それを優先させているのである。

国家は、主権者が平和や生命の保障のために、すべての人びとが契約を守ることを前提として成り立っている。こうして成立した社会契約が破棄されるならば、また戦争状態の中で自己の存在を守るしかなくなる。国家は契約を維持するための手段にすぎない。

## 4. 現代の課題

社会的な権利がさまざまに保障されても、その中に生きる人間が、権利の由来を認識し、権利を自覚しなければ、実践されることはない。言葉として理解していることと感覚の上で理解していることとは異なっている。また、認識するだけでなく行動することが重要である。そういう意味で、「人間尊重」という言葉がどこまで生活実践の中に根づいているか問題である。明治・大正・昭和期を通して、もちろん今日もだが、日本の社会がどれだけ人間の生命を尊重してきたのかは歴史を顧みればわかることである。日露戦争までは西欧化をめざしてさまざまな制度を導入した。形式的には自由を得た。表面的に日露戦争に勝利した日本は、昭和期にはいると対外的野心の中で軍国主義化していく。連合国が火砲の集中や機動力を中心とする中、日本軍の主たる戦法は日露戦争当時と同じく、突撃であり、夜襲であった。補給を無視した無謀な作戦も行われ、戦死よりも餓死者の方が多量な戦場も多々ある。兵器にしても人間の命を犠牲にしたものが開発された<sup>21)</sup>。特攻しかりである。国が人間に死ねと命令する権利はない<sup>22)</sup>。いかなる国家であっても人間の生命・生存権を奪う権利はない。補給を軽視するのは日本の体質であり、勇ましさを鼓舞すれば頼りがいがあり、補給等慎重なことをいえば、弱者と見られる。ちなみに、現在の日本の食糧自給率は39%、エネルギー自給率は5%にすぎない。石油の戦略的備蓄が1年半分あるとはいったが、とても有事に対応する能力はないことだけ記しておく。

日本の民主主義は、戦後ようやく70年の歴史



を経過したにすぎない。終戦を経て天皇主権から主権在民になったことの意味をどれだけの国民が認識しているのかは疑わしい。前時代の遺制は常につきまとい残存しているが、それを克服することが現代の課題でもある。単なる知識としてではなく、生活実践として主権在民や人間尊重ということが認識されなければならない。

## 注

- 1) 田中浩著『ホッブス研究序説』お茶の水書房、1982、p.388
- 2) 佐久間・坪井編著『現代経営組織論の基礎』、学文社、pp.3-10
- 3) ミル著『経済学原理』、岩波文庫、第1巻、p.244
- 4) Ibid. ,p.247
- 5) Ibid. ,pp.226-229
- 6) タビストック学派については以下の論文に詳しい。風間信隆稿「社会・技術システム論と「自律的作業集団」」『明大商業論叢』VOL.63 NO.5-6、1981
- 7) Ibid. ,p.116
- 8) C.ヘリグレン著、丸山恵也他訳『ボルボの実験』、中央経済社、1997、pp.6-9
- 9) 務台理作著『現代のヒューマニズム』、岩波新書、1961、p.9
- 10) 務台理作著 同上 pp.108-117
- 11) ホッブス著『リヴァイアサン』（世界の名著）中央公論社、1971、pp.154-155
- 12) 同上 pp.160-163
- 13) 同上 p.161
- 14) 同上 p.172
- 15) 同上 pp.196-197
- 16) 田中浩著『ホッブス研究序説』、お茶の水書房、1982、p.28
- 17) 同上 p.34
- 18) ホッブス著 同上 pp.162-163

- 19) 田中浩著 同上 pp.37-38
- 20) ホッブス著 同上 pp.236-238
- 21) 零式艦上戦闘機（いわゆる零戦）が世界最強の戦闘機だというのが、その設計思想には人間を守るという観点はない。格闘戦に強く航続距離を長くするために、軽量化し防御を無視し、パイロットの命を守ることをおろそかにした。軽量化のため、翼の中の燃料タンクは防御されておらず機銃弾が当たると簡単に火を噴いた。対するアメリカは、F6Fグラマン・ヘルキャットを開発し、パイロットの安全を図るために防御を重視して、操縦席は鉄板で囲まれ、燃料タンクはゴムで覆われていた。
- 22) 特攻に限らず、戦争における人間性無視の例は数多くあり、本も出ているので取り上げないが、小沢郁郎著『つらい真実-虚構の特攻隊神話』（同成社、1983）は特攻隊の真実の姿を検証している。志願制の虚妄、体当たり技術の困難性、戦果と犠牲の実態などを客観的に論述している。また、戦争に勝者はいない。マハリッジ著藤井留美訳『日本兵を殺した父』（原書房、2013）は沖縄戦に従軍して帰国した父の戦後の精神崩壊の様子を描きながら、足跡をたどるというノンフィクションであり、戦争の悲惨さと戦うことの虚しさがよく描かれている。

## 参考文献

- 風間信隆（1981）「社会・技術システム論と「自律的作業集団」」『明大商業論叢』VOL.63、NO.5-6
- 田中浩（1982）『ホッブス研究序説』、お茶の水書房
- 趙偉稿（2009）「自動車産業における作業組織の方向性」『産業経済研究所紀要』第16号
- ホッブス『リヴァイアサン』（世界の名著）、中央公論社、1971年
- 務台理作（1961）『現代のヒューマニズム』、岩波新書
- 柳田謙十郎（1960）『歴史と人間』、文理書院
- Berggren, Christian（1992）*Alternatives to Lean Production: Work Organization in the Swedish Auto*

経営論集 Vol.1, No.1 (2015) pp.1-9

*Industry* (C.ヘリグレン著、丸山恵也他訳『ボルボの実験』、中央経済社、1997)

Mill, J. S. (1871) "*Principles of Political Economy with some of their applications to Social Philosophy*" (J.S.ミル著、末長茂喜訳『経済学原理』、岩波文庫、1959)



**Journal of Public and Private Management**

Vol.1, No.1, March 2015, pp.1-9

ISSN 2189-2490

## **On the Idea of human for respect**

**Junichi Tsuboi**

Faculty of Business Administration, Bunkyo University

✉ [tsuboi@shonan.bunkyo.ac.jp](mailto:tsuboi@shonan.bunkyo.ac.jp)

Received 31 January 2015

### **Abstract**

The idea of human for respect is the historical result. But there's a perception gap on this in point.

In that respect I'd like to consider what the philosophy of enlightenment in civil society and dehumanization in capitalism.

Keyword: human for respect, humanity, dehumanization, civil society

**Faculty of Business Administration, Bunkyo University**

1100 Namegaya, Chigasaki, Kanagawa 253-8550, JAPAN

Tel +81-467-53-2111, Fax +81-467-54-3734

<http://www.bunkyo.ac.jp/faculty/business/>

**経営論集 Vol.1, No.1**

ISSN 2189-2490

2015年3月27日発行

発行者 文教大学経営学部 坪井順一

編集 文教大学経営学部 研究推進委員会

編集長 鈴木誠

〒253-8550 神奈川県茅ヶ崎市行谷1100

TEL : 0467-53-2111 FAX : 0467-54-3734

<http://www.bunkyo.ac.jp/faculty/business/>